※「わや便り第７号」に掲載したものを再掲しました。

まぶしい実践

NPO 法人まぐのりあ監事　　柳誠四郎

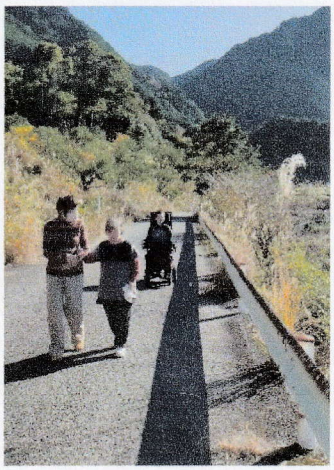
たまに、和家を訪ねてりかさんと顔を合わせると、両手を前後に交互に振り「散歩に行こう」とアピールしてきます。和家に来る前には訪問介護の支援を受けて、家の近くを散歩するのを楽しんできた人です。

和家の二人の利用者さんは、和家に住んで、週５日は、歩いて 20 分ぐらいのところにある、通所の生活介護施設に通っています。

一人は、電動車いすを利用していて、毎日自力で移動するのは難しいしんごさんで、車で送り迎えをして通所しております。“びっくりする取り組み”はこの時です。同じところに通っているもう一人のりかさんは、別に職員が付き添って歩いて通うのです。

和家は、人手が少なくて大変な中でも、こんな活動を“無駄”とは思わないでやっていけるグループホームです。散歩したいという思いを、支援する側からの意味だけでとらえて、歩行マシンを導入すれば、手も取られないし、雨の日だって筋力維持の運動ができるというような“専門性”だけに簡単に呑込まれないで、暮らしを大事にする実践です。

長年障がい者の生活支援の場で仕事をしている私には、そんな実践が宝物のように思われます。きっと、りかさんは、出会う人たちと話をしたり、季節を感じたりして、心地よく疲れる散歩をしたいのだと思うのです。



もちろん、現実は、きれいごとだけでは済まないのは承知しています。帰りには、限られた職員数と折り合いをつけて、２人一緒に車で帰るのです。

それでも、しんごさんが、「今日は車いすで帰りたい」という良い天気の日には、二人一緒に歩いて帰るときもあるそうです。帰ったすぐでもりかさんは、両手を振って散歩に行こうとアピールするときもあります。そして職員さんは、それに工夫して応えようとしているのが見えます。

本人にとっての意味を知ろうとし、共感し、こんな“無駄”を大切にしていく気持ちを持ち続けるのが、暮らしを支える専門職に求められる大切なものではないかと思うのです。

ケアの専門性を意識するあまり、つきあいが「方法」になってしまったら、本末転倒だ。
「素人」に学ぶ専門性というものこそ、ここで求められているのではないだろうか。
「噛みきれない想い」　鷲田清一著　角川学芸出版より